

〈指導教員推薦文〉

社会学部 教授 島 村 恭 則

川路瑞紀「廃仏毀釈のゆくえ——鹿児島県日置市『妙円寺詣り』の事例——」

推薦理由

明治維新を迎え、新政府は1868年に「神仏分離令」を發布し、それまで神仏習合状況にあった日本の宗教界を、神道を国教化する政策にしたがって再編しようとした。その際に、民間レベルで全国的に展開された廃寺、僧侶の還俗、仏像の除却等を伴う大規模な仏教排斥運動を「廃仏毀釈」という。

この運動は、その後、1875年に明治政府が信教の自由を認めたことにより沈静化し、仏教界は復興に向かったが、中には、廃仏毀釈がもたらした結果が未解決のまま現在に持ち込まれているケースも存在する。

このことを発見し、その経緯と現状を、文献資料と当事者からのインタビューの両方を駆使して解明したのが本論文である。具体的には、鹿児島県日置市の妙円寺において近世期から行なわれてきた「妙円寺詣り」という祭礼が、廃仏毀釈運動による妙円寺の廃寺、妙円寺に代わる徳重神社の創出により同神社の祭礼とされ、それ以来、信教自由化によって妙円寺が復興したにも関わらず、現在まで「妙円寺詣り」は徳重神社でのみ行なわれているという事例を取り上げ、妙円寺、徳重神社、日置市当局の三者それぞれの言い分を精緻な調査によって記述、分析している。

これまで、廃仏毀釈運動自体がいかなるものであったかについての研究は数多く行なわれてきたが、廃仏毀釈運動の影響が今日にまで及んでいる事例を取り上げて分析した研究は皆無に近いといってよい。したがって、本研究は、単なる卒論のレベルを超えて、学界が共有する価値のある研究となっている。また、卒論そのものとしても、事例に対する丁寧な記述、論理的で簡潔な文章表現など、平均水準を超えている。

以上の理由から、本論文を社会学部優秀論文賞候補論文として推薦した。